

中山恭秀(編)

3 日間で行う理学療法臨床評価プランニング

評者 藤澤宏幸

(東北文化学園大学医療福祉学部)



「人間は時間を識り、時間的世界のうちに時間的に存在する。動物には時間を識るということはない(『人間と動物』より)」とは心理学者ポイテンディクの言葉である。人は、時間を自ら管理できる可能性を与えられたと言ってもよい。しかし、適切な修練を積み重ねれば具体的な能力に結びつかないというのも、また真実であろう。

その意味で、本書はプランニングという時間管理に焦点をあてて編集されていることに特徴がある。これまでに出版されている理学療法評価学の書籍は、標準的な検査・測定法について疾患ごと、障害ごとにとまとめられたものが大半を占めている(それはそれで大事なことではあるが)。しかし、この本はひと味違う。「流れ」を大切に、事前準備、1日目、2日目、3日目と時間軸で行うべき作業がまとめられている。「前日までに必要な医学的知識」、「あると助かる知識」では、最低限確認すべき知識とアドバンスなものが別々に提示されている。さらに、「前日に始める情報収集」についても、箇条書きでまとめられ一つずつチェックできるようになっている。その後、評価1日目からの流れがイラストを有効に活用しながら書かれており、手順を直感的に理解できるという印象で、抵抗感が少ない。

一方、評価の手順における大きな特徴は、必ず動作能力の把握から始まっていることにある。時間の制約

があるなかで、トップダウンの手法を用いて効率よく評価を行えることは、臨床で要求される大切な技術の一つに違いない。さて、その日の検査・測定が終わると、「流れに乗らないのはこんな場合?」「統合・解釈のポイント」などの項目が並び、実習生がよく難渋する箇所についての解説が続く。さらに、2日目を終えて、ICF(International Classification of Functioning, Disability and Health: 国際生活機能分類)の生活機能モデルをもとに評価の整理を始め、3日目にはADL(activities of daily living)などを検査して、障害構造を決定するという手順である。急性期における評価が前提のため、ICFのみならず、ICIDH(International Classification of Impairments, Disabilities and Handicaps: 国際障害分類)などの他の障害モデルについても例示されていると理解しやすい側面もあるが、そのことは編者も熟慮してのことと記されている。

臨床家の視点で簡潔にプランニングの要点をまとめられた本書は、実践的な評価の「流れ」を知りたいと思っている学生と、新人理学療法士の皆さんへ特にお薦めする一冊である。

●B5・208頁・4色刷

定価 3,990 円(本体 3,800 円+税 5%)

南江堂刊 2013 年